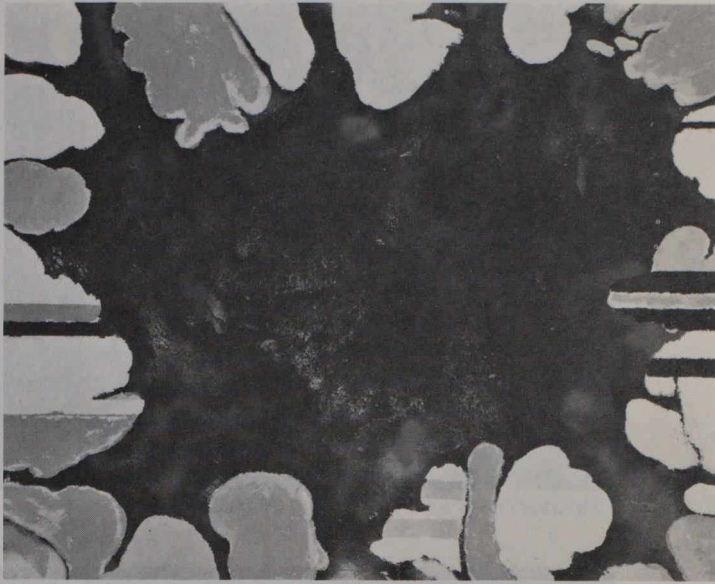




から八十五パーセントに急増していた。

おまけに、突如として、あたかも長年の怠慢を一夜で取り戻そうとでもするかのように、英国ロンドンのコモンウェルス・インスティテュートで、現代カナダ芸術展が三つも開催された。さらに、その年の内に、カナダ運輸省は、国内の各空港に芸術作品を飾る大がかりな計画に着手した。この計画は、政府建造物新築の際には、必ず予算の一部を芸術作品にあてるという、欧州の例にならうものとして奨励された。

巡回審査員

カナダ・カウンスルが画家たちたいする懸案をいよいよ実行に移したのも六十年代であった。一九六六年には巡回審査員制に踏み切った。審査員たちが初めて全国をあまねく回って画家達と話し、作品を見た。この時まで、画家たちとの接触は手紙でやりとりされていた。

さらに、カナダ・カウンスルは、はじめて美術館に出資したり、画家の特別企画を助ける短期補助金を設けるなどの新機軸をうち出した。六十年代半ばまで、カナダの画家たちがお互いに顔を合わせる機会などほとんどなかったし、まして全国的な会合など皆無であったが、一九六六年になって、カナダ・カウンスルの資金でサウンディングスと呼ばれる一連の会合が開かれることになり、事情は一変した。

六十年代初頭、カナダ・カウンスルの出資金の中、視覚芸術にあてられたのは、わずか二五パーセント以下に過ぎなかったが、六十年代末には四五パーセントに近づいていた。

その六十年代の興奮と成果が絶頂に達したのは、建国百年の年であった。第二次世界大戦をへて、カナダは国家のアイデンティティと目的にたいする新しい意識に目覚めたが、この国家意識は、静かにしかも着実に育ち続けていた。それが今、歓喜あふれる祭典となって爆発した。そして、カナダの人々は、はじめて、手放しでその興奮と、自国の創作芸術にたいする誇りに酔った。

しかし、世界的に見ると、カナダの絵画が演じたのは脇役に過ぎなかった。モントリオール万博では、カナダに関しては「カナダにおける絵画」と称する小規模の展示がカナダ政府館のロビーで開かれただけで、エキスポ最大の絵画展は「人間とその世界」という絵画史上のあらゆる分野、時代を網羅した国際的展示であった。これにはカナダの絵画も二点、ポール・エミール・ボルジュアスとジャン

・ポール・リオベルの作品が陳列されていた。

振り返ってみると、建国百年という年は、カナダ芸術史上、ひとつのクライマックスであったばかりでなく、一転機でもあった。

いうまでもなく、グレート・アート・ブームは、トロント・スター紙上のロバート・フルフォードの言葉を借りると、結局「実際には存在しなかったブーム」であった。画商たちも、カナダ絵画の取り引きがほとんど底をついていたことを内々認め始めていた。民間画廊の中には、閉鎖を余儀なくされたものもあった。一体何が起こったのだろうか。活況の中で美術評論記者は主要な事実を見落していた。それは市場のほんとうの規模であった。

絵画を実際に買うほどの愛好家は、せいぜい数百人に過ぎなかった。他方、画廊の経営費は急上昇の一步をたどり、同じ十年間に絵画も値上りしたとはいえ、経営は火の車だった。

「カナダ的なもの」

しかし、カナダの芸術が、ますます健在で、力強く生き続けていることは、次の事実が示している。

一、トロントは、依然としてカナダの商業芸術の中心で、北米における現代芸術の一大センターである。

一、カナダの画家たちはC・A・R（カナダ画家代表団）という組合を組織し、目下、カナダ国内の美術館と、展示した作品の貸与料、作品を複製する際の版権料の問題を含む、「公正な取引」方法について交渉中である。

一、現存する画家たちは一人残らず、

何らかの方法で、われわれに共通の美的経験の集積に絶えず寄与している。前進を続け、次々と高い境地に達していく画家があるし、他の関連分野で、目覚ましい新境地を開拓して行く画家もある。さらに特筆に値するのは、画家が新しい技術を身につけていくにつれて、一般の側にも新しい形式や美的モードを受入れる素養が育ちつつあることである。

カナダの現代絵画にはどうも「カナダ的なもの」が不在であるように思われる。国籍というものが全く感じられない。カナダの現代絵画は、あくまでその創作者独自のものであると同時に、手法の点ではインターナショナルである。しかしカナダの絵画が現在の定義による国籍というものからはみ出してしまったとしても、それよりさらに重要なことは、カナダの絵画が初期の「あどけなさ」を失い、青年期に達したということである。

しかし、矛盾するようではあるが、カナダ絵画は一種の国籍をもっている。ボルデュアスの抽象画はカナダの絵画である。その道に詳しい美術評論家以外の誰かが見てもカナダの絵画と知れるからではない。そんなことはどうでもよい。カナダ人の私が、その絵がカナダ人によって描かれたことを、また、そういうカナダ人画家が存在することを知っている、それが重要なのだ。

（著書「現代のカナダ絵画」より）